

北の資料 126

講演会・資料でたどる北海道の歴史 講演録

「絵葉書に写された北海道と江別」

講師：佐々木 孝一 氏

北海道立図書館

はじめに

北方資料室は、平成 22 年に開設 40 周年を迎え、数々の記念事業を行いました。その一つとして、シリーズ第 7 回にあたる「講演会・資料で語る北海道の歴史」を平成 22 年 11 月に開催しました。

講師には、『新・江別市史』編さんなどに携わり、また江別市情報図書館にながく勤められ、館長となられた佐々木孝一氏をお招きし、時代を活写する「絵葉書」を題材に、北海道と江別の歴史について講演いただきました。

当日は、氏が個人で所有する数々の絵葉書コレクションがスライドで紹介され、郵便と絵葉書の歴史にまつわるお話と、そこに写し出された各地のすがたに、絵葉書の魅力を再発見した方も多かったようです。

今号は、その講演録として発行しました。この記録をきっかけに、地域に関する資料への新たな興味を持っていただければ幸いです。

【講師プロフィール】

昭和 25 年秋田市生まれ。

昭和 49 年北海道大学教育学部を卒業、江別市役所に奉職。

江別市情報図書館、江別市教育委員会社会教育課等の勤務を経て、平成 14 年から江別市総務部参事（市史編さん担当）となり、平成 18 年から平成 24 年 3 月まで江別市情報図書館長を兼務されました。

【著書】

- ・『図書館と私の出会い』（著者刊 1991 年）
- ・『図書館と私の出会い 2』（著者刊 1998 年）
- ・『図書館と私の出会い 3』（著者刊 2010 年）

「資料で語る北海道の歴史」講演会

「絵葉書に写された北海道と江別」

講師：佐々木 孝一氏

平成 22 年 11 月 6 日 於北海道立図書館研修室

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました佐々木孝一です。人生の先達を前にして話をするのは大変おこがましい感じですが、たまたま「新江別市史」を編纂していて、その後、市史・行政資料担当ということで現在の職務を担っております。そんなような関係で、今日は秘蔵の絵葉書を持ってまいりました。図書館のものではありません。私個人のコレクションでございまして、こういうものを買っていますといつ離縁されるかなと非常に心配しているのですが、ご紹介をして、絵葉書の歴史と、北海道と江別がそれにどう写されていたのか。どのくらいお話しすればよろしいのでしょうか。1時間ちょっとくらいですか、わかりました。

それでは最初に絵葉書の歴史を紹介したいと思います。郵便と絵葉書は切っても切れない関係にあります。郵便制度はイギリスで始まったのですが、これが 1840 年という年になります。天保の改革のちょっと前くらいです。これが画期的なのは、イギリス国内ですが、全国どこに出しても均一料金だということです。

今日本でも、重さによっても違いますけども、九州に出すときは 120 円で、北海道内だったら 50 円だと、そんな話はないですよ。ところが、江戸時代の飛脚便というのは距離によってお金が違ったのです。イギリスではローランド・ヒルという人が始めたのですが、瞬く間にヨーロッパ中に広まりました。イギリスではこの後、ビクトリア女王の時代を迎えて、海外にいっぱい植民地を作ります。で、一番最初に何をやるかと言うと、郵便局を作るのです。つまり、ここは自分のところの領土だということで郵便局を作って、切手を発行し始めるのです。そんなようなことで、郵便制度が世界中に広がっていきます。

日本では明治維新の後、明治 4（1871）年に郵便制度が発足します。これは、ここに関矢（信一郎）先生がいらっしゃるけれども、越後の前島^{ひそか}密という方が政府に出仕しまして、「お前イギリスに行っているいろいろ勉強してこい」と明治 3 年にイギリス留学します。そこで郵便制度を研究してきて、全国均一料金での郵便、切手と葉書を出して日本でもその制度が始まるのです。一円切手に肖像画が出ています。「切手」「郵便」「葉書」といったもの名付け親でもあり、「郵便制度の父」といわれています。

それ以前、どういう様子だったかと言うと、日米和親条約の締結が安政 5（1858）年ですが、イギリスやフランスやそれからドイツだとか、同様の条約を結んだ各国は開港地に郵便局を作るのです。居留地郵便と言います。考えてみると当然のことでありまして、外国から外交官や貿易の関係者などが来るわけですが、国との間に郵便の出し入れがあるわ

けです。それだけではなくて、お金を送ったり送られたり、実務上必要に迫られる事情があったりします。そんなようなことで、横浜に外国の郵便局、フランスの郵便局とかイギリスの郵便局とかができる。一方、幕府や大名などの子弟がイギリスやフランスなどに留学したりします。薩長に付いたのがイギリスですよ。坂本龍馬をご覧になっているところの辺は非常に詳しくなっているのではないかと思います。幕府にはフランスが付きます。フランスの方に將軍の弟とかが留学するのです。そういうときに手紙のやり取りもそうなのですけども、お金ですね。フランスにお金を送る時に横浜の郵便局の、フランスの郵便局から出しています。そんなようなことで、居留地郵便というのがずっと続くわけなのですが、明治4年に日本で郵便制度が発足した後もこの居留地郵便というのは4、5年続きます。明治8（1875）年くらいまで続きます。要するになかなか一旦取った権益というもの列強は手放したがるらないのです。

ところがひょんなことから、アメリカが一番最初にこの居留地郵便局廃止の交渉に乗ってくれるのです。というのは、サミエル・M・ブライアンというアメリカの一青年が、お金も何も持たないでポーンと横浜に来るのです。そして日本で郵便の仕事に就きたいと考えていたのですけども、東京の郵便局を見たらあまりにもみすぼらしいものだから、彼はがっかりするわけです。

それで当時のアメリカの公使のところへ駆け込みまして、日本の、当時は駅通寮と言いましたけれど、郵便を司るところで雇ってくれるよう交渉してくれと頼みこむのです。デロングという米の公使が早速政府に交渉しに行きます。「居留地郵便の制度をあなた方はなくしたいと思いませんか」という、そういう風な意味のことをいうわけです。日本としては何とかして、これは一種の不平等条約ですから、居留地郵便局を廃止したいという気持ちを持っていました。アメリカの一青年を当時のお金で、年俸450円という大金で雇うことにします。名目としては色々あるのですけども、郵便制度の普及研究というようなことで雇うのです。そして、彼は日本を代表してアメリカに行って居留地郵便を廃止する糸口の協定を結ぶことに成功します。ですから、ヨーロッパに手紙が行く時、明治4年から8年くらいまではアメリカ大陸を経由して行きます。郵便に関する件で、日本とアメリカの関係は平等になったわけです。

ヨーロッパにそういうようなルートが開けていったけれど、いろいろな不便がありました。その後、これ、右書きなのですけれど、「万国郵便連合加盟 25 周年祝典記念」という風に書いてあります。万国郵便連合というのはUPU (Universal Postal Union) と言うのですけれども、実は一番最初に日本が平等条約になったのもUPUなんです。明治10（1877）年に本部のあるスイスのベルンで開かれた郵便連合の会議で、加盟が承認されます。23か国目、アジアでは初の加盟国になります。これもイギリスやフランスは最初、反対するのですが、ドイツ政府の助言があったのです。「スイスで工作しておくとなんりいくよ」というような勧告があったのです。それで明治8、9年にスイスに特使を派遣して猛烈な工作をします。で、郵便連合に加盟することが無事できたのです。郵便連合に加盟する

ともう郵便のやり取りでは諸外国と平等の関係になったのです。そういうようなことで、明治8、9年を境にして日本における居留地郵便と言うものが段々となくなっていきます。先のブライアンも日本の理事官として在日郵便局の撤去についてその後も活躍したようです。

この葉書、実は絵葉書なのです。裏をちょっと、ぱっとめくるとこんな風です。岐阜県の泉町というところに住んでいる方に出したものです。明治35(1902)年6月13日の発行です。郵便業務を扱っていたのは、当時は逓信省と言いましたが、逓信省で一番最初に出した絵葉書なのです。

今は国が直接絵葉書を出すことはほとんどないのですが、実は第二次世界大戦前は絵葉書をたくさん出しています。全部で37件、郵政省、当時は逓信省ですが、逓信省発行の絵葉書というものがあります。その第1号になったのがこれです。1902年というのが一つのみそでありまして、実は1900年と言うのは明治33年になります。2000年というのは平成12年という具合になっているのですが、日本の年号と西暦が交差する場合に、ひとつの目安として1900年、明治33年と覚えておくと大変便利なのですが、その時にこれが出ております。

その前にも絵葉書というのが実は出ていたかもしれません。この後はたくさん出るわ出るわ。種類は恐らく何億という数になると考えます。枚数にしたら気が遠くなるくらいの数が出ていたのではないかと。これは一つに明治30(1897)年に、郵便法の改正がありました。それまでは官製の葉書しか認められていなかったのです。要するに、逓信省で出す葉書しか認められていなかったのですが、明治30年に私製葉書を作ることが認められます。

それに伴って、絵葉書も一種の私製葉書なのですが、裏に切手を貼って出すような私製葉書がどんどん出てくるわけですが、これ、図柄は楠木正成、後ろは江戸城というわけですが、実は6枚セットです。こちらの方は現在の逓信省の建物です。当時の郵便局というのは郵便だけではなく、それ以外に電信電話業務をやっているのです。郵便局の1階というのが大体、郵便とか為替とか貯金の業務とかをやっているのですが、2階は、江別の郵便局もそうだったのですが、電話の交換機がありまして、戦前は電話交換とか電報も郵便局の業務としてやっていたのです。戦後になって、日本電信電話公社と郵政省に分かれるのですが、この当時の逓信省の業務というのはそこまで含まれていたのです。

絵葉書が爆発的に流行する時があります。それは、日露戦争の時です。先ほど逓信省で出した絵葉書は37種類と言いましたが、実は日露戦争の時に9種類出ているのです。4分の1は日露戦争当時の絵葉書です。当時は、その絵葉書を買ってどうしたのかと言いますと、切手を貼ってスタンプを押す。それが大変流行りました。これは、日露戦争の、戦役記念ですが、看護師さんの活動を図案にした絵葉書です。ここに切手が貼ってありますね。これ、青いスタンプが押されているのですが、日露戦争の戦勝記念スタンプなのです。

日露戦争の戦勝記念、戦役記念の絵葉書というのはこれ以外に9種類ありまして、数も

夥しいのですが、色々使い道があったようです。一つは贈答用に使われたこと、それからもうひとつは戦いの最中からこの絵葉書はどんどん出るのですけれど、要するに軍事郵便ですね。兵隊さんが満州の方に行っているわけですが、その方が家族に手紙を書くときにも使われたようです。

戦争が終わった後も逓信省は調子に乗ってという言い方は変ですけども、こうした絵葉書をどんどん出し続けます。これには別の理由がありまして、実は間接税の一種と言うか、政府の歳入の増加といいますか。日露戦争の前後にはいろいろな間接税が新設されました。値上げもされました。砂糖だとかタバコだとか、そういうような嗜好品に対する間接税がどんどん上げられたり、それから新税が、まあ戦費を賄うといった理由があったと思います。絵葉書もその一つとして活用されたようです。

これも戦役記念の絵葉書なのですが、ここに描かれているのは日本海海戦です。ここに戦勝記念のスタンプが押してあります。明治の人たちの一種の記念品ですね。日露戦争というのは実は大変な苦戦だったのですが、歴史で習われたことかと思えますけども奉天の大会戦とか、日本海海戦とか、国民の間には勝ちいくさと知らされます。戦勝気分がかなりあったようです。そんなようなことでこのような絵葉書がたくさん売れました。

日露戦争が終わった後は、国家の慶事や祝い事に、逓信省では官製の絵葉書を出しつづけます。切手を貼ってスタンプを押すのが大正の半ばまで流行します。そのいくつかがあるのですが、④のところの大正大礼記念というのをひとつあげます。貼ってある切手は、大正大礼の時のもので、これが出たのは大正4（1915）年です。前年の大正3年の11月12日、大正天皇が即位された時の記念切手ですね。この絵葉書も今でいうところの郵政省、逓信省から出された記念の絵葉書です。図案は紫宸殿の中で即位の礼をやっているところを描いていたものとなっています。同じように切手を貼って記念印を押す、こういうような趣向になっております。

それから、平和記念という絵葉書が出ています。大正3（1914）年からヨーロッパでは第1次世界大戦が始まりました。大正8（1919）年にパリ郊外のベルサイユで講和条約が結ばれるわけですが、ご承知のとおり、戦火は主にヨーロッパでしたので、日本は兵站基地として非常な好景気に沸くわけです。この絵葉書もそうなのですが、印刷技術は大変進歩いたします。2枚組で同じように記念のスタンプを押している、大変色鮮やかなものです。もう1枚、農家の刈り取りを意匠にした絵葉書があります。

その後、逓信省のものは大正10（1921）年7月20日、逓信事業創始50周年記念という絵葉書が出ます。初期の郵便ポストと馬で郵便物を集めているという、郵便事業が始まった当初のころの様子を描いています。この時出されたのはもう1枚ありまして、郵便が始まったころの葉書と切手です。当初の印刷技術は、明治4（1871）年のころですので、幼稚なものでした。特にお札なんか明治の初めは偽札が出て大変困ったそうです。それで4種類の切手につきましては、京都にある松田玄々堂というところが印刷した手彫りの切手なのです。48文（モン）と100文と200文と500文。48文は市内郵便の葉書に相当する料

金です。100文が全国に流通する値段ということで、出しています。こちらの方は葉書ですね、当時の葉書は長い紙だったのです。裏は、当時出された切手にスタンプを押すという風になっています。

大体この辺くらいまでで、絵葉書のブームというのは終わります。この後は非常に間隔が開きだします。まあ恐らくその最後を飾ったのがこれであろうということなのですが、7番の昭和大礼記念です。これは昭和3（1928）年、今の天皇陛下のお父さん、裕仁さんが即位された時の、切手も出ましたけれども、その時に通信省から出た時の絵葉書、これが1枚ともう1枚、こんなようなものが出ております。

戦前の絵葉書、政府が発行する絵葉書というのはこれで終わりになります。戦後になって、2回だけ絵葉書を出しております。民間からはたくさん出ていますけれども、戦後の政府発行の絵葉書というのは、2種類あります。そのうちの一つがこれになります。日本絵葉書第1集と右の方に書いてあります。左の方には日本国憲法公布記念と書いてあります。出されたのは昭和21（1946）年の12月27日ですが、日本絵葉書第1集という割に第2集、第3集は出ておりません。これが一つ出ただけです。ただし、中身は大変充実しております、当時の気鋭の画家、これは藤田嗣治の絵になっております。全部で3枚組ですが、もう1枚は日本画の川端龍子（リュウシ）の絵になっています。当時、画壇の重鎮、3人を起用しているのです。

で、一番最後です。私は現物は持っておりませんが、政府で出した、もう郵政省に変わっていますが、絵葉書の一番最後は、「通信総合博物館竣工記念世界切手展」というものです。昭和40（1965）年3月29日に生まれました。ですから、日本国憲法の公布記念からここまで、政府発行の絵葉書と言うのは時期が飛んでいるのです。民間ではたくさん出ているし、各種団体でもいろいろな絵葉書を作ります。自治体でも作った例があります。後で、江別で作った絵葉書をお目にかけますけれども、そういう風なものがあるのですが、要するに国が作った絵葉書というのは今の通信博物館の絵葉書が最後のものになっています。

それでは、北海道の町が絵葉書にどんなような形で取り上げられたのかというお話をさせていただきますと思います。私製葉書が明治30年に解禁されて、色々な団体で出していると言いましたが、主な目的のひとつは、お土産ですよ。みなさん、どんなところで絵葉書を買いますか。観光地が多いと思いますが、目立った観光地とはいえない、旭川の絵葉書が結構あります。古本屋で絵葉書を扱っていますが、例えば弘南堂さんに行きますと、主人が奥の方に坐ってしまして、横のところ引き出しがあります。そこに絵葉書がいっぱい置いてあります。北海道資料として貴重な絵葉書も多いので、道立図書館所蔵のものが後ろに展示していますが、北海道の古本屋ですと樺太関係の絵葉書というのも多くあります。

で、何で旭川の絵葉書が多いのかといいますと、旭川の街の成り立ちと関連しています。昔は兵役の義務というのがありました。数え年20歳で徴兵検査を受けまして、選ばれて現役3年の義務がありました。後には2年現役をやって、1年帰休というようなことで、兵

役期間が1年短縮されるのですが、本籍地のあるところに集められたのです。

旭川にはご承知のように第七師団がありました。そこに集められた人々は、入隊の時餞別を貰ってくるわけです。当時ですからテレビも映画もない、娯楽がない時代でしたので酒盛りをやって壮行会みたいなことをやって、兵隊に来るわけです。それで除隊した時、大体二等兵で入って、優秀な兵隊は上等兵になって帰っていくわけですが、親戚一同や周囲が集まって除隊祝いというものをやるわけです。その時にこういうところに行っていたのだと、絵葉書がお土産になるのです。

これは常盤公園ですね。今は常盤公園の中に、この辺に永山武四郎の像がありまして、神社があると思いますけども、そここのところを描いたものです。市役所だとか常盤公園だとか、そういうようなところばかりではなく、街の様子が描かれております。大正の初めの旭川だと思いますが、師団通りというものがあります。今の買い物公園のところは師団通りです。こういう写真をデジタル化すると、見えないものも見えてくるそうですが、河川の様子だとか平屋の家屋だとか歩いている人たちの姿だとか、思わぬものがアップすると見えてくるのですが、そういう1枚になっております。もう1枚、旭川商業などがあるあたり、これは一条通りの写真です。自動車が写っている、こんなような形で旭川の風景が写っている。

当時の道内の町が写っているものをいくつか紹介したいと思います。

これは小樽の花園の様子です。大正年間だと思いますが、殷振を極めた港町小樽の様子がこの中には活写されています。こちらはどちらかといえば観光名所の一つということで、手宮の古代文字のところを撮ったものを図案にしています。

これは帯広の駅前通りです。今でしたらきっと、ビルがだーっと立っているのですが、ほとんど低い建物しかない。自動車が一台走っていて、自動車が珍しいから撮ったのだらうと思うのですが、帯広の駅前の様子が、帯広市街と言う風に紹介されています。

これも帯広の街ですね。ほとんど高い建物のない、平屋か、せいぜい二階建て物の、帯広の街の様子がこの中には写っている。その3となっていますから、もっとたくさんセットになっていたと思うのですが、

観光絵葉書と言うものもたくさん作られます。この1枚は北海道に旅行した方が出したのだらうと。長野県に出しているのですが、裏がこんなふうには、倶知安の方から見た羊蹄山ということになっています。次は洞爺湖の絵葉書です。戦前と戦後のものとは右書きになっているか左書きになっているかで分かります。「国立公園法」が出来たのが昭和6(1931)年ですが、北海道でも阿寒と大雪山、昭和9年に指定された公園と昭和11年までに指定されたものがありますが、北海道では2つ国立公園に指定されます。全部で、全国で12カ所ほど国立公園に指定されるのですが、「国立公園法」ができて、指定が進んでいくことで観光絵葉書の発行にますます拍車がかかっていくわけです。戦前の観光絵葉書、もちろん中身は白黒です。今のようなカラーの絵葉書ではありませんけども、国立公園を含めて観光地の絵葉書と言うものをいくつか目にすることができます。

札幌はそれではどのような形で写っていたのかなということになります。その前に1枚、これは札幌で行われたエスペラント大会の時の絵葉書です。昭和11年8月9日ということで、記念印をこうして押している絵葉書になっています。札幌の絵葉書はたくさんあります。札幌と函館というのが大変多いのですが、道都札幌というとりあげ方が多いようです。函館ですといろいろな取り上げ方があります。経済の中心とか北洋漁業の基地だとか、何種類か北方資料部にありますので、今日見て関心のある方は是非「札幌の絵葉書を見せてほしい」「函館の絵葉書を見せてほしい」ということでご覧になってみてください。皆さんの思わぬ情景がそこに写っているのかなと思います。

今日持ってきた札幌の絵葉書、戦前のものばかりですが、いくつかご紹介したいと思います。これ、言わずと知れた大通り公園です。ここが大通り公園の3丁目です。こっちが大通り公園の4丁目。それから山、ずーっと見えますけども、その山並みがこっち側です。ここに電車が、市電が走っています。札幌の市電というのは大正7(1918)年の北海道博覧会(開道五十周年記念)の時に馬鉄から架線を敷いた市電になります。ですから、これは大正時代なのですけども、大正7年より後だということが分かります。

もう一つはここに、銅像、今は噴水になっています。ここに永山武四郎の銅像があったのです。当時、大通り逍遙地という風に呼んでおりました。これ、絵葉書を作ったのが中西印刷さんなのですが、中西印刷の店がこの辺にあるのですね。自分のところをちゃっかり入れているのですけども、そんなような絵葉書です。永山武四郎の銅像ですが、戦争中に金属回収に会いまして、鉄砲の弾になってしまいます。

大通り公園の地図をですね、2ページ目の裏ですね。これはさっぽろ文庫から取ったものですが、大通り公園の今昔ということで、上の方が昭和12(1937)年の住宅地図をもとにして作製したと書いてあります。下の方は昭和25(1950)年発行の札幌市卓上案内をもとに作製しているとあります。上の方の西4丁目通りを挟んで、永山銅像というように書いてありますけども、その3丁目と4丁目写っているのがこの大通り公園の絵葉書です。

お気づきかと思えますけども、豊平館が大通り公園の西1丁目のところにありました。最近迄、市民会館の建っていたところでした。このところで大通り公園が半道ほど狭まっていたのです。そして3丁目から西へ今の幅で大通り公園がずーっと続いていました。14丁目の奥のところには控訴院、後には高等裁判所になるのですが、そういう形に昭和12年当時なっていたということです。下の方は昭和25年当時ですが、ご承知のように進駐軍が入ってきまして、進駐軍のためのテニスコートだとか、野球場だとか、大通り公園がすっかり変わってしまいます。進駐軍がいなくなった後、公園化に向けて大変な努力をして、今のようになるわけなのです。

札幌の絵葉書その2です。豊平館ですが、西1丁目にあった頃の豊平館です。何か今ある場所(中島公園)と、水辺の風景が似ていますよね。これは当たり前でありまして、移築した後で、札幌市で中島公園をこういう風に、ロケーションも同じように作ったのです。ですから、元の場所にあるには越したことはないと思うのですが、どうでしょうね。これ

は判断の分かれるところだと思うのです。元の場所にそのままの形であるのは道庁庁舎ですよね。あれはあった場所にほぼそのままあって、かつ池の様子も変わっていない。でも時計台はどうでしょう。元々のロケーションは失われていますね。

次は北海道神宮です。北海道の総鎮守という、昔は神社に格がありましたので、道内で一番格の高い神社なのです。それから、北大の農学部の新しい校舎です。こちらの方が中島公園、菖蒲池というのですけども、今でもこんな形でボートを浮かべたりしています。こっちの方は北大の農学部の写真になっています。それから、これが停車場通りとなっています。電車がありまして、この駅前通りのところに、私、北海道に来たのが昭和 44 (1969) 年なので、こういうアカシアの並木の駅前通りというのが記憶にないのですけども、この場にいらっしゃる方は、並木の駅前通りのご記憶がある方がたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。

これは普通の札幌の絵葉書なのですが、実は絵葉書クラブと言うのがありまして、「札幌の姿」という風な絵葉書のセットが出たりします。昭和の初めくらいですが、この中に大変 1 枚、貴重な絵葉書を見つけました。紹介いたします。あの、道立図書館ですね。ここに移ってくる前の、大正 11 (1922) 年摂政宮の御下賜金でできた道立図書館でありまして、昭和 42 (1967) 年ここに移ってくるまでの建物でした。後に三岸好太郎美術館に一時使われて、現在は文書館の燻蒸施設か何かが地下にあります。文化の殿堂とキャプションが付いています。図書館というのはそういう風な意味でいいですよと、資料の蓄積と提供と保存と情報の発信といった機能があるわけで、これはまさしく当時ピカピカのできたばかりの姿であろうと思います。これが「札幌の姿」の中に入っていました。

ここまでで一応、第 2 章まで終わったのですが、少し休みを取りましょうか。それではこの時間で 2 時 10 分までちょっと休憩をしたいと思います。

もう少しお付き合いください。大通り公園の話が出ましたので、中島公園の話をしたいと思います。資料の最後のページ、中島公園の変遷を、一番最後の裏側のところですよ。これは明治 25 (1892) 年当時の中島公園です。もともと中島公園の場所には貯木場があったのです。ちょうど真ん中のあたりに、鴨々川とか、豊平川とかから水を引いて、今菖蒲池になっているところですよ。当時は札幌区と言う前のことで、札幌の街と山鼻村とが明確に分かれている時代です。大通りから北は北大だとか官庁街があり、大通りから南が商業地という風な具合で、飲み屋が薄野にあって、薄野の西側には水原さんのリンゴ園が広がっているという、そんなようなところだったのです。

中島公園というのは、市の一番南端にある公園（緑地帯）であったのです。因みに北端の方は、北大の南側の所に偕楽園というのがあります。一時は荒れ果てていたのを札幌市が買い取って内部整理したみたいですけども、あの辺一帯が大原専門学校のあるあたりを含めて、北海道における都市公園の第 1 号だという風に言われております。

東のあたりは苗穂なのですが、そんなようなことで、都市計画の中で位置づけられていくわけですよ。当初は定山溪の方から豊平川を流して、ここに貯木場を作っていました。木

を貯めて、市街地の建設資材を置く場所であったのですが、次第にその役目を終えて、ここ全体を、競馬場を桑園に移して、全体を公園として整備しようということになります。その中でここが池、菖蒲池になったというわけです。明治の末にはこんなような形で整備されるわけです。

この図は、大正7（1918）年のものです。この年に北海道開道50年の“北海道大博覧会”というのが開かれます。大正7年というのは大変意義深い年でありまして、北海道が府県並み、要するに内地並みに、民政上でも教育の上でも文化の上でも追いついた年、という風に後世の道史研究者が言っております。開道50年ということで、すったもんだするのですが「新撰北海道史」が編まれたりします。そんな時に、北海道大博覧会が行われて絵葉書も出ます。ここにあるのがパビリオンの図です。こっち側には何々館というのがありますが、地図を参照してこれから絵葉書をご覧いただくと興味深いのではないかと思います。まいました。

最初は中島公園の門ではありません。実は札幌の駐車場のところに博覧会、これ8月1日から始まるのですが、こんな大きな、向こう側が南になるのですが、電車通りですから、こういう風な大きなゲート、歓迎の門を設けて博覧会を盛り上げた札幌駅前の様子です。

中島公園の入り口のところにも、こんなような形のゲートを設けました。今の地下鉄の中島公園駅あたりから入っていく通りなのですが、この時に馬鉄に代わって電車が開通します。ちょうどパークホテルの横くらいのところが電車の止まる場所でした。複線ではなくて単線だったそうです。後にこの辺に札幌の市立高女だとか文化専門学校とかができるのですね。その時代までは電車が残っていたということです。

電車は停車場通りからまっすぐ来ればいいようなものなのですが、ご承知のようにまん中に薄野があります。薄野を通すには、「風紀上好ましくない」ということで電車の路線を曲げるのです。曲げて西3丁目の方から南進する形で敷かれます。ただ、この電車も8月1日に間に合わなかったです。2週間ほど遅れて運行開始したそうです。

それから歓迎塔が、実はモニュメントなのですが。歓迎塔がどこにあったのかというと、大正7年の北海道博覧会の地図に、真ん中に高いのがあります。これが歓迎塔です。これが実写の写真になっております。後は馬蹄形のような形でパビリオンが周囲を囲み、横に建物があったりします。いくつか紹介します。これは林業及び工業館というもので、確かめてみてください。ちょうど池のあたりとそこの塔をかこむようにして、ぐるーっという風な施設が建てられてきています。次に機械館という、こちらの方は、ここ（配布資料）の番号の方には出ていませんけども、この並びからいうと6、7、8の、この塔を囲むような形で出ています。

池の中にも建物を作っています。音楽堂を作ったり、これは池の方に、③迎賓館となっていますけども、その姿がこの中に写っています。それから演芸館、これが演芸館なのですが、ちょうどこの図で言うと、湖の横のところにあった。次にこれが菖蒲池のと

ころから撮った演芸館あたり、並んでいる姿なのですが、この建物は後に一部を残します。この後、昭和6（1931）年に中島公園を会場にして、やはり北海道大博覧会、まあ2番煎じなのですが、規模としては大正7年よりもだいぶ小さくなりますが、もう1回行われます。その時に使われました。戦後、札幌学院大学の前身である文化専門学校が開学します。その校舎に使われます。それから工業館だとか残った建物は北海道美術展、今でいう道展などの展覧会の会場になったりします。それから施設を全部解体したのではなくて、一部残って、残された施設は戦後まで使われたものもあります。

解体したものを移築して、それぞれの町で復活させてという例があります。例えば江別でも江別駅前から緑町の方に、いわゆる駅前通りなのですが、あそこは公園通りというのです。あれはまっすぐ行くと飛鳥山公園に行くから公園通りなのですが、その公園通りのところに公園館という映画館がありました。これが北海道大博覧会で使った施設を移築して、映画館にしたと言われています。当初は富士見座と言ったのですが、後に公園館になります。取り壊されて王子のサービスセンターになったり、今はパチンコ屋さんになっています。他の町にも移築をして使ったという例があるようです。

昭和6年に中島公園でもう1回、博覧会が行われています。この時は、国産新興北海道拓殖博覧会となっておりますけども、同じように中島公園で行われています。ちょうど20年くらい後ですね。設計を東京の建築会社に頼みまして、既存施設をだいぶ塗り替えて使ったということが報道に出ております。これがその時の絵葉書です。当時の葉書の料金1銭5厘切手を貼って、これはもちろん模式絵図なのですが、複葉機を飛ばしたり、そういうような絵葉書になってます。実際はどうだったかと言うと、池の中にあった施設はこんなような形で残って使ったようです。スタンプが押されて見にくいのですが、メイン会場になった中央部の施設です。

博覧会と言うのは、当時いろいろところで開かれていたのです。中島公園では、昭和6年より後は大規模な博覧会というのはなかったのですが、北海道大博覧会ということで、昭和12（1937）年に小樽で開かれた博覧会があります。小樽の博覧会なので、小樽港の、これは昭和12年7月15日から小樽で開かれた博覧会の時の絵葉書になっています。切手を記念印で消してある一種の記念品なのですが、そんなようなことで絵葉書を発行しています。

それとこれはもしかしたら子供の国ができた時の博覧会なので行ったことのある方がいらっしゃるかもしれません。戦後もう一度中島公園を会場に、博覧会が開かれたことがあります。ただ、この時はメイン会場が中島公園ではなかったのです。見てきたような嘘ですけども、中央卸売市場の広大な駐車場が今ありますけども、そこがメイン会場だったそうです。中島公園が第2会場で、さらに小樽の祝津に第3会場という風なことで行われた北海道大博覧会です。

どんな展示があったのかと言いますと、桑園の方の中央卸売市場の駐車場を使った方が第1会場、札幌中島会場は第2会場なのですが、東南アジア館という風に、この時、こち

らに豊平館が見えます。豊平館が移築した直後なのです。豊平館が、ここに美術館と書いてあります。この時は美術展で使われたのですが、豊平館がここにあるので、ここは今恐らく天文台があるあたりの場所になります。中島公園でこの時一番人を集めたのが、これだそうです。現代科学の粋を集めた科学館というもの、今でいえばパビリオンということになります。

もうひとつ、昭和 38 年の時の博覧会で特筆するものとして、これは昭和 50 年の頃の中島公園なのですが、ここに植物園のあったのをご記憶の方いらっしゃると思いますが、今これはないですね。百華園と言いまして、国内だけではなくて、いろいろなところから植物を集めてきて、ここに植物園を作ります。真ん中に山内壮夫さんの「森の歌」という、モニュメントがあったのです。百華園がなくなるときに、これは中島児童会館ですが、最初は進駐軍の兵舎を持ってきたかまぼこ型のなのですが、こっちの方に今、児童公園が出来て、この真ん中に山内壮夫（モリオ）さんの「森の歌」のブロンズ、モニュメントを移します。

それから、子供の国ですね、今キタラのある場所にあった子供の国と、スポーツセンターと球場がありました。スポーツセンターのは西側を向いていたのです。自動車の通り道が公園内にあったからです。もう建物はないので、さら地になっていますけども、山鼻側を向いていたのです。中島スポーツセンターは“国体”の時にできた建物です。国体といっても昭和 29（1954）年の時の国体でありますけども、自動車道路、自動車が公園の中を走って、行啓通りに入る、これバス路線だったのです。そんなようなことで、中島スポーツセンターの玄関が山鼻側を向いていた。今のバスはここを通過していますが、道路にお尻を向けるような形で立っていました。

もうひとつ、実は戦前、北海道大博覧会に匹敵するイベントで絵葉書が出されたのがあります。それが昭和 11（1936）年の陸軍特別大演習の時の絵葉書です。絵葉書を出すということは大変お金がかかることです。リスクを背負うことになります。絵葉書は出せないけどもイベントの時、記念に何かをしたいという風なことで企画されたものにこういうようなものがあります。

これは当時の官製の葉書です。これにスタンプを押しまして、これは昭和 10（1935）年の国勢調査の記念で、樺太の豊原のスタンプが押ししてあります。要するに何か記念はしたいのだけれども、絵葉書を出す力はないのだけれども、後世の残したいというようなことで、こういう風な記念のものがたくさんあります。

次は大泊ですが、「樺太庁施政第 28 回記念」ということで、昭和 9（1934）年 8 月 23 日に行われた式典に併せて作られています。豊原や大泊は結構あるのですが、これはちょっと珍しい。敷香、今ポロナイスクと言うのですが、ずーっと北の方の、王子製紙などがあったところなのですが、ちょうど新聞と敷香の間に鉄道が延長されます。それを記念して、当時の S L が図案になっておりますけども、こんなように残されています。それから西海岸の方の炭鉱の町の恵須取なのですが、これは泊居支庁、鶴城出張所管内の共進会記念と

というようなことで、昭和 11（1936）年 10 月 15 日の日付になっております。

さて、陸軍特別大演習の記念絵葉書であります。昭和 11（1936）年の 9 月の末から 10 月の初めにかけて、陸軍特別大演習が北海道を会場にして行われました。ここら辺も演習の場所になったわけではありますが、昭和天皇が行幸されるということで、当時のことから、官民をあげての歓迎体制がとられます。もちろんインフラ整備を伴います。例えば江別ですと、当時の林業試験場で休息されるわけですけども、そこまでの道路を慌てて良くするとか、そんなようなことが記録されています。

大本営が置かれたのは北大の農学部でありました。北大の農学部は昭和 11 年に新しくできたばかりの建物です。そこに大本営を置いたわけです。これは絵なのですけども、このずっと前方、クラーク像の斜め向かいに聖跡碑というものがあります。天皇陛下がこの場所に来たのだよという碑なのです。私が北海道に来た当時は大学紛争の盛んな時でありまして、聖跡碑やクラーク像に落書きされるくらいの時代だったのです。碑の上に立って盛んにアジ演説をしていたりで、あれでは碑の意味なんていうのは忘れ去られているのだろうなというようなことを感じていました。

この時、先ほど樺太の色々なスタンプがありましたけれども、行く先々でこういうようなものが残っております。これは、行幸記念ということで、昭和 11 年 10 月 6 日には札幌に来ましたよという記念です。実は江別があるのです。林業試験場に 10 月 7 日においでになったということで、こんな葉書が残っています。翌日は琴似にありました農業試験場を視察して、石狩琴似という、当時は琴似町なのですけども、こんな具合ですね。そして、翌日が小樽、そして函館と、これで北海道から去られるわけですけど、こんなような形で残されています。

そして、もう 1 枚、これはご記憶の方が多いかと思いますが、北海道百年記念。記念塔そのものは、野幌の森林公園の中にありますけども、その建設記念、昭和 43（1968）年 9 月 2 日に、北海道百年記念塔建設期成会から出ています。

ちょっと押してきましたので、急ぎます。

それでは江別です。どんなような絵葉書を作ってきたのか、あるいはどんな風に描かれてきたのかをお話ししたいと思います。

最初の絵葉書は、これなのですね。触ってみてください。写真が貼ってあるのです。絵葉書と言っても初期です。貼ってある切手が菊切手と言う名称なのですが、明治 30 年代と考えられます。台紙の部分だけ売られている、そこに生写真を貼るのです。当時の江別橋と向こう側に鉄橋が見えます。函館本線の鉄橋なのですけども。淀川舟が 3 艘ありまして、江別河港で栄えた頃の図柄なのですけども、写真をぺたっと 1 枚貼る、これが最初の頃の絵葉書でありました。

明治 41（1908）年に富士製紙が進出しますと、絵葉書もいろいろと作られてきます。富士製紙株式会社江別工場という風なことで作られている。企業がどうしてこんな絵葉書を作ったのかと言いますと、視察にお見えになる方のお土産用であったわけです。従いまし

て、公式の絵葉書と言うのは中身を見ますとあまり面白くありません。これは富士製紙の当時の正門です。大正の初めだと思いますが、今、この上にはバイパスがかかっています。こちらに神社があるのです。稲荷神社というのですけども、7月の第1日曜日がお祭りになっています。

このような正門の写真ですとか、川っぶちから見た当時の富士製紙、“石狩川から工場を望む”という風なことで、撮られている写真の絵葉書になっております。それから、製紙会社の紹介ですので、原材料はこんなように川に入れて、筏を組んで、流して。今は千歳川といいます。昭和9（1934）年までは江別川と言ったのですけども、そこで上げていくといった様子を絵葉書にしています。当時、東洋一の工場だということで、東洋一の抄紙機、紙を漉く機械ですが、幅が186寸という大きな幅でやれるのは東洋ではここだけだとか、自慢の抄紙機を持っていた富士製紙の工場の絵葉書です。

ところが、もう一つ富士製紙をめぐるのは、面白い絵葉書があります。面白いというのは語弊がありますが、江別富士製紙祭運動会会場、これは飛鳥山が会場なのですが、7月に富士製紙のお祭りがありました。このお祭りのハイライトは山車行列だったのです。山車が江別の街中を練り歩いていく、それを見るために近郷近在から見物人がたくさん集まってくる。それを写真に撮りまして、近郷近在の方が来た時に売り捌く。絵葉書として売るといふ商売が成り立ったのです。この写真を撮ったのが高橋写真館という写真屋さんです。高橋写真館については、この図版の方にもありますが、この方は高橋写真館の2代目ですが、「歴史をフィルムに、親子2代マチの証人」。昭和51（1976）年、インタビューに応じた、「江別百年特別顕彰の人」の記事です。3条3丁目に写真館がありまして、撮った写真がこれなのです。

これ何枚か組になっておりまして、さっきもありましたけども、川っぶちから見た工場と末広神社、お稲荷さんです。日本の神社の大体4分の3くらいは稲荷神社だと言われていすけれども、<いねなり>に通じるということで、護国豊穰商売繁盛の神様が稲荷神社なのですね。昔丸井さんの屋上に子供の国があった時に、あそこに行くと神社があるのです。何でこんなところに神社があるのだろうと不思議で仕方がなかったのですけども、実は、その<いねなり>に通じて、商売繁盛ということで、日本の有数の大企業の屋上にも、確かめたわけではないので、関心のある方はどうぞ確かめてください、屋上には稲荷神社があるそうです。

それからこれが山車ですね。仮装の実況なのです、これがね。高橋写真館の発行です。これは神社下の宮下通りのところ。宮下通りというローカルですかね。その頃の仮装です。要するに、富士製紙はそれぞれ機械部だとか、機関部だと、製材部だとか色々部があるのですが、部ごとに毎年毎年趣向を凝らしてこのように山車を作って、対抗戦をやったのです。これが街の中を練り歩いていったので、実況ということになっています。

次の一枚は、多分六軒町のあたりではないかというのですけどね。江別の町に2階建の建物があった場所と言うのはかなり限られているというようなことを高間さんから指摘

を受けまして、多分その辺ではないのかなと、ただ場所は分からないというお話でありました。同じ場所でこんなのも撮られています。

もう一つはこれです。「北海道林業試験場絵葉書」で、これも視察者のためのというか、そんなようなことなのですが、貴重な映像が残されています。林業試験場の、実は左書きなのですよ。でも、この木の成長具合から言うと、建てられて、すぐ後ではないかと思われるのです。左書きは戦前のものでは珍しい。恐らく科学者の方々が集う場所ですので、横書きで論文を書いたりしたのではないかと、そんなことが影響しているのかなと思います。これが正門です。それから林業試験場、大沢のあたりにこういう風な東屋があった。(参加者：そこで植樹したとの発言あり)それからこちらが当時の林業の様子です。それともう1種類あります。こちらの方は少し時代が下がります。玄関前の樹木が成長しています。ですからこれは、時代的にいうと、戦前は戦前なのですが、時代が下がるという感じです。

その他に様々な形でもって、絵葉書が出ております。昭和のふたけたくらいになると、「石狩の畜産」とか、それ以外にも「支庁石狩の農業」、「支庁石狩の林業」とか、こんなような絵葉書が続々と出ています。この中に、江別が写っている貴重なものを2枚見つけました。

一つはこれです。「札幌市ほか五郡畜産組合江別競馬場」というキャプションです。これは飛鳥山にあった競馬場ではありません。今でいういずみ野の方ですね。いずみ野に昭和9(1934)年に移転するわけです。飛鳥山の競馬場は1周千米なのですが、山を削って競馬場にするのを江別の屯田兵村が反対したため、3コーナーから4コーナーにかけて、ちょっとした傾斜があつてそこで落馬が相次ぎます。見ている方は、それはそれで面白いかもしれませんが、やる方はたまったものじゃないということになります。

江別競馬というのは開村50年の記念イベントの1つとして、昭和3(1928)年に始まるのですが、なかなかの売り上げがあつたようです。というのは、春夏2回、2日間ずつなのですが、札幌岩といひまして、札幌・小樽・岩見沢という風に順繰り4週間くらい、廻って歩いてそれぞれ開催するものですから、それを渡り歩く人たちがいた。当然関係者は渡り歩くのですが、今のようにきちんと商売として成り立っていたわけではないので、農家が本業だったりするわけなのですが、馬を連れてその時に集まってくるという競馬だったので、売り上げが当時のお金で4万円とか5万円とか、そのくらいあつたそうです。

飛鳥山が危険だということで、昭和9年に新しい競馬場を作ります。幅員が広くなり、1周1000米から1200米のフラットなコースを作ります。ただ、昭和9年というとは如何にも時期が悪いですね。もうすでに満州事変が始まっていたし、昭和12(1937)年には日中戦争が始まります。そんなことで段々売り上げが落ちていって、さらに払戻金に税金をかけるようなことが起こったりして、とうとう競馬が中止になってしまいます。昭和12年の秋が最後だったように記憶しています。ただ、この新しい競馬場のピカピカな頃の、

これが絵葉書です。

もう1枚、保障責任北海道製酪販売組合連合会牛酪工場というものです。これ、バターを作っているところでしょうね。これがどこの写真かといいますと、緑町に北辰乳業があります。今は北辰乳業の工場になってしまいましたが、その前は雪印の工場でした。

江別は、昭和30年代の半ばくらいまで、第1次産業、第2次産業、第3次産業の区分が、3分の1、3分の1、3分の1だったそうです。そんなことで、調和のとれた農工都市というように要覧の中に書いてあります。それが大きく変わるのが、昭和38(1963)年11月の大麻団地の造成です。どんどん変貌していくわけですが、酪農が盛んだった頃、また戦後に酪農が復活しまして、日本のデンマークと呼ばれた時代が一時期あります。そんなこともあって、「支庁石狩の畜産」という中に2枚含まれておりました。絵葉書が時代の証人になるのだということを痛感した次第であります。

第5章、いよいよ最終章なのですが、それでは江別がどんなような絵葉書を作ってきたか、江別町及び江別市の関連団体のものを紹介します。

まず、こちらになります。「江別開村50年記念絵葉書」ですね。これはもう写真の貼り付けではありません。印刷です。開村50年というのは昭和3(1928)年です。多くの寄付を集めて記念誌を出したり、それからもちろんこのような絵葉書を作ったりします。かなりにぎにぎしくやりました。この建物は古い江別町役場です。大正14(1925)年に新築したばかりの江別町役場です。このバルコニー、戦後にこのバルコニーがなくなるのですね。腐って取れたのだと古い人は言うておりました。それから掲示板がこっち側にあって、池がここにあった。そしてこれが、当時の町長は吉原兵次郎という方ですけど、吉原さんが作ったというか、発案した江別の町章です。

この建物ができた時、設計変更だとか何とかですったもんだするのですが、実はこの建物を見ると、似た建物が道内にいくつかあるのです。何となく旧浜益村役場に似ているなと思うのですが、一番似ているなと思ったのが古平の役場です。古平の役場は今も残っております。ちょうど、積丹の方から来ましてまっすぐ行くとお寺がありまして、その横に何やら古ぼけた建物があって、写真で見た江別町役場とそっくりだなと思ったのです。後から聞きましたら、それはそのはずなのです。江別の役場を建てる時に、古平の図面を借りて作ったのです。設計をそれからひっぱってきたということなのですが、古平の役場はまだ使っているのですね。その辺ちょっと時代を感じたりします。

江別では昭和42(1967)年11月、今の場所に市庁舎が移る迄使っていました。戦後はとにかく市になって、福祉事務所ができたり、建設部ができたり、水道部ができたりして、手狭になって継ぎ足しで、来た市民がどこに行ったらよいか迷ってしまうという大変不評の庁舎でした。

開村50年ですので、当然開村当時の歴史の絵葉書も出しました。これは対雁学校ができた時の、新しい校舎ができた時の、ここに当時の開拓使の高官がずらっと並んでいます。対雁学校はアイヌのための学校でしたので、周囲に樺太アイヌの人達が見えます。この建

物は石狩川の近くにあったのです。今、対雁小学校は移転しまして、名前だけは引き継いだのですが、建物の一部は残っていたようですが、解体して、詳しい解体の経過は、市の行政資料として残っております。

この絵葉書に石狩大橋があります。下には川船がありますけども、江別の川港の様子が出ています。石狩の河口から遡上してきて、後には札沼線の鉄橋ができるのですが、石狩大橋が完成するのは大正9（1920）年ですけども、当時、唯一石狩川を跨ぐ橋でありました。今は、新石狩大橋だとか、美登位の方に行くと、もっと橋がかかっていますけども、国道をここまで来て、また275号に上がっていったり、12号に結ばれていったりというような交通の要衝の橋でもあったわけです。

これは江別町開村50年の時の絵葉書でしたけれども、未入手なのですが、新江別大橋ができた時の、多分これは建設に携わった方々が作った絵葉書を見たことがあります。もし古本屋さん等が出てきたらすぐ手に入れようとは思っているのですが、まだ未入手なのでご紹介できません。

戦後になりますと、今度はこれは昭和20年代の後半、市制施行の前後で、「観光えべつ」という絵葉書が出ております。原始林の中なのですが、緑を入れたり黄色を入れたり、これは流行りだったそうですね。今はこんなのは邪魔になるのですが、カラー写真のない時代に少しでも色を付けたという写真なのです。これは煉瓦工場ですね。今でこそ天日干しというのはないのですが、当時はこのような形で、煉瓦工場では広い場所を必要としたのです。煉瓦を干したり、形を整えたりしてたたく作業を朝早くからやるものから、夏の間の作業なものですから、これで付近の人は目を覚ましたと話してくれました。

こちらは、当時の江別町の市街、白木屋ですね。銀座街ってどこにでもあるものですね、こうやって見ますと。それから江別が誇る工場群、これが北日本製紙です。戦前は王子製紙の江別工場だったのですが、ご承知のように航空機の会社、王子航空機になりました。王子航空機になったものですから、抄紙機などは満州や台湾に持っていったりして、製紙工場でなくなってしまうのです。戦後、製紙の技術者が集ってきて、ここで製紙工場を再建しようということになります。それで抄紙機などを集めて、北日本製紙の名称で昭和23年に1社1工場ということで開業します。それが昭和46年まで続く。また本家帰りをして現在、王子製紙、王子特殊製紙ということになるのですが、その昭和20年代の時の写真がこれです。

もう一つ、今度はこれはカラーなのですね。「観光の江別」ということになります。これは、昭和37、38年くらいのではないのかと言われてはいますが、この「観光の江別」の中にいくつか取り上げられております。こちらで煙を吐いているのが王子製紙です。ちょうど林木育種場あたりから石狩川の方に向かったアングルの写真です。それから今はなくなりましたが、NHKの野幌放送塔というものがありました。11丁目通りの3番通りのところにあつた、これ60何メートルあるのだそうです。円筒のように見えますけども、実は40センチくらいの直径がありまして、ところどころに窓が開いているの

だそうです。内部に梯子がついていまして、メンテのために登っていけるようになっていたといいます。もちろん命綱をつけていたと思いますけども。登った人の話によると、大変眺めがいいところであったといいます。ここは今、文化財の整理事務所になっております。市でこれを買取った時に鉄塔はなかったのですけれども、電池だとかそういう風なものがいっぱいあったそうです。今、江別太の方に移っておりますけども、そのラジオの放送塔がありました。観光名所という風なことで、これを葉書の方へ取り上げたのだらうと思います。

それから江別だとこれだろうと思ったのでしょうかね。旧町村農場です。樽川の方から移ってきて、戦後になりますけども、赤毛の牛ではなく、ホルスタインになっています。町村農場は色々映画のロケ地になったりもします。田中絹代がメガホンを取った「乳房よ、永遠なれ」というのがありますが、主演が月岡夢路です。中條ふみ子の生涯を描いた映画だったそうですが、ロケは昭和 31 (1956) 年ですが、北海道らしい風景ということで撮ったそうです。カメラ片手に多くの人が集まったと新聞の報道は伝えております。

次は野幌原始林の中なのですけども、車が走っています。バスも走っていたのですね。今の森林公園の中央に小学校があつて、戦後開拓で新野幌といいました。道立図書館のところも新野幌ですが、第一といったところです。新野幌第一部落といった。道立図書館の前にサイロがあります。あれはその名残なのです。わざと残したのだそうです。ここら辺の元々の名前が新野幌第一、その前が西野幌です。野幌の西側にあるから西野幌なのですけども。

第二というのはちょうど今のテクノパークだとか、あちらの方でした。第三というのは原始林の真ん中、小学校のあるあたり。で、広島境の方に第四部落と第五部落がありました。それぞれに、終戦とともに職を失った人で農業を希望する人、第一のあたりですと、厚別にあつた陸軍被服省の札幌支所だとか、根室支所だとか、そういうところの人たちが入ったわけです。第四、第五になりますと海外からの引揚者という風になります。実はここら辺は農業に不適な場所でありまして、それでなくともこんなに木がたくさん生えていたところでした。それで木を切り倒して火薬を使って抜根をやったというように、寺崎さんという方が証言しておりますけども、そんな記録が残っております。おまけに無水地といまして、水に不自由します。開墾はこんな条件で辛酸を極めたものになります。早い話、私にですね、失業したから明日からお前農業をやれ、とこんなようなことなのです。

原始林は特別天然記念物と言われていました。実は天然記念物であつた原始林は今、広島境にしかないのです。戦争中、艦船の資材ということでバツバツ切ってしまった。一番切りやすいのはこの辺だったのです。そこが切り株だけ残してあつたので、戦後開拓の農業の方を入れたわけなのですけども、そんなようなことで、天然記念物の指定を返上します。「洞爺丸台風でやられたから」というようなことにします。今は、「野幌原始林」というのは通称であります。ただ、開拓記念館がここに来て、戦後に離農した農地をだいぶ買い上げまして、それで木を植えなおして、林相の回復に努めています。今こういう形

で残っているのは、先人の努力の賜物であるという風を感じざるを得ません。

江別の火力発電所です。火力発電所は今ありません。私の記憶の中にあるのは赤白の3本煙突の火力発電所です。あれは江別駅で降りると真正面に見えたのです。でも、戦前の方の記憶だと、これよく見えないのですけども4本あるのですよ。黒い煙突が4本立っているのです。その時の火力発電所です。石炭火発なのですけども、昭和37、38、39年と、3年に渡って機能強化します。それで赤白のだんだらの煙突に切り替わるわけなのです。

こちらには北日本製紙の工場が見えます。ちょうど美原のところから撮った風景になります。これが昭和30年代の後半に出た観光の絵葉書。江別観光協会というところで、ほとんど事務局を市役所でやっているのです。

市として最後に出した公式の絵葉書がこれですね。本郷新さんのモニュメント、フェニックス像です。2年くらい前に本郷新の生誕100年がありまして、その時に取材が来ました。江別の市民会館のところにこれが立っているのです。これは、「開基」90年を記念して作られた。その時寄付を集めるために協賛会がありました。それでもって作った絵葉書です。今は「絵になる江別」とか、風景を描いた絵葉書を観光協会が出しておりますけども、市が出したのはフェニックスの絵葉書が最後だと思います。

フェニックス像ですが、この後、横に市民会館が立ちまして、管理棟のせいで、さっぱり目立たなくなります。関係者の方が大変心配をして、どうせならこれを目立つところに寄付したらどうだという話になったりします。寄付するのだったらうちで受け入れるよと石狩町が手を挙げるのですが、そういう風なわけにもいかないであろうと、今でも市民会館の横に立っております。

こんなようなことで駄弁を弄してきました。一部絵葉書の内容を、複写をしてお手元に差し上げたりしております。今失われた風景があります。先ほどの札幌の中島公園の様子もそうでしたし、それから旭川の市役所もそうでした。そんなようなことで、当時の資料的な裏付けですね、逆に言いますと、色々な状況からこの絵葉書はいつくらいに作られたものであるか特定していくことも大事だと思います。1枚の絵葉書を見るときに、みなさん方の中でこのようなことだったのだなと、そういう風な意味において言うと、人生に寄り添う一つのものであるのかなと思ったりしています。

道立図書館には、後ろにもありますけども、このような絵葉書がたくさんあります。記憶を呼び戻してこれからの生活の活力というか、こういう風な時代だったのだなということを思い出すのは非常に大事なことだと思います。人生には忘れてはならないことがたくさんあると思いますけども、そんなような時の助けとしていただければなと思います。長い時間ありがとうございました。

参考文献

- 『日本切手百年小史』 今井修 日本郵趣出版 1978
- 『日本記念切手物語』 山口修 日本郵趣出版 1985
- 『日本記念絵葉書総図鑑』 島田建造 日本郵趣出版 2009

- 『新江別市史』 江別市 2005
『野幌原始林物語』 江別市教育委員会 2002
『さっぽろ文庫 22 市電物語』 札幌市教育委員会 1982
『さっぽろ文庫 32 大通公園』 北海道新聞社 1985
『さっぽろ文庫 84 中島公園』 北海道新聞社 1998

北方資料室40周年・資料で語る北海道の歴史（第7回）

絵葉書に写された北海道と江別

江別市情報図書館 館長 佐々木 孝一

第一章 逓信省発行絵葉書

- ①絵葉書のはじまり<私製葉書の発行許可>
- ②万国郵便連合加盟二十五年祝典記念（1902. 6. 18）
- ③日露戦役記念<陸海軍、赤十字事業、凱旋ほか>（1904～6）
- ④大正大礼記念（1915. 11. 10）
- ⑤平和記念（1919. 7. 1）
- ⑥通信事業創始50年記念（1921. 4. 20）
- ⑦昭和大礼記念（1928. 11. 10）
- ⑧日本国憲法公布記念 日本絵葉書 第1集（1946. 12. 27）
- ⑨最期の一枚 逓信博物館竣工記念世界切手展（1965. 3. 25）

第二章 北海道の街と絵葉書

- ①旭川市の4枚
- ②小樽、帯広、室蘭
- ③観光絵葉書<国立公園法の制定>
- ④そして道都札幌の情景

第三章 イベントと絵葉書

- ①開道五十年記念北海道博覧会をめぐって（1918. 8. 1～9. 19）
- ②博覧会記念絵葉書（1931、1937&1958）
- ③昭和十一年陸軍特別大演習をめぐって（1936）
- ④北海道百年記念式典（1968）

第四章 絵葉書に写しだされた江別

- ① 初期の一葉
- ② 富士製紙江別工場
- ③ 富士のお祭と高橋写真館
- ④ 北海道林業試験場絵葉書
- ⑤ 石狩支庁の産業紹介

第五章 江別町（市）および関連団体の絵葉書

- ①江別村開村五十周年記念（1928）
- ②「観光えべつ」（1953、4?）
- ③「江別の観光」（1958）
- ④最後の一葉（1968. 11. 3）

大通り公園（札幌市）の今昔

◎佐々木 孝一のプロフィール

昭和 25（1950）年秋田市にて出生

昭和 44（1969）年より北海道在住（札幌市&江別市）

昭和 45（1970）年北海道大学入学

昭和 49（1974）年北海道大学教育学部卒業、江別市役所に奉職現在に至る

平成 14（2002）年江別市総務部参事（市史編さん担当）

平成 18（2006）年江別市情報図書館長を兼務 現在に至る

講演会・資料で語る北海道の歴史 講演録
「絵葉書に写された北海道と江別」
(北の資料 第126号)

発行日 平成24年3月31日

編集 北海道立図書館北方資料室

発行 北海道立図書館

〒069-0834 江別市文京台東町41番地

電話 (011) 386-8521

FAX (011) 386-6906

<http://www.library.pref.hokkaido.jp/>
